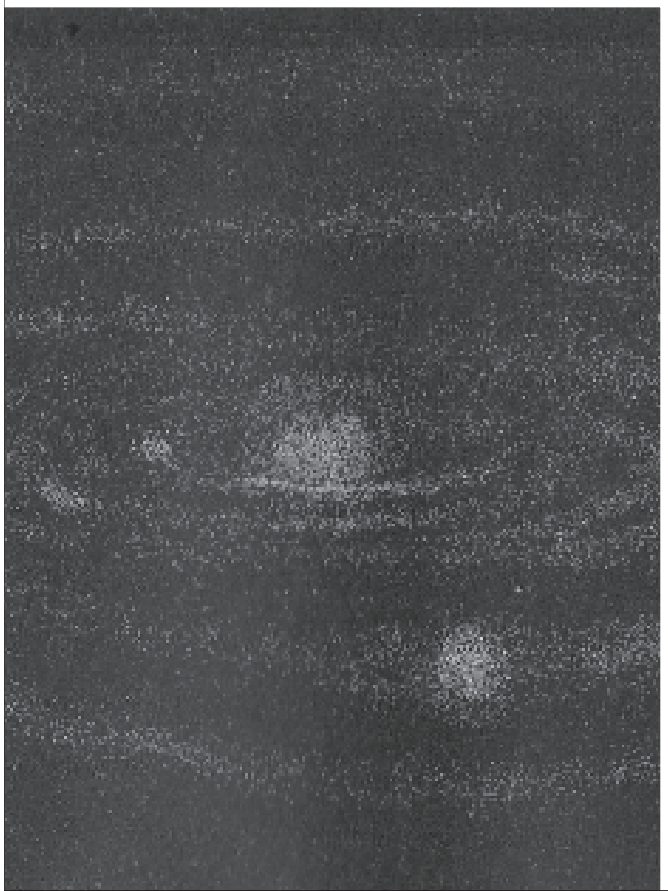
第1章　最古の天文観測

開化程度の最も低い人間にとっては暦などというものの必要がなく、従ってまた時の尺度を自然界に求めようとする機縁にも接しないのである。



宇宙の生成に関する自然民の伝説

古代文化的国民の宇宙創造に関する諸伝説

最古の人間は疑いもなく狩猟と漁労によって生活していたであろう。ただ飢餓に迫られ、しかも狩猟の獲物の欠乏のために他の栄養物を求めるような場合に至って、そこで初めて草木の実や、食用に適する根の類をも珍重することを覚えたのであろう。もっともこれらはただ応急のものであって、多分主として婦人たちがそれで間に合わせなければならなかったかも知れない。男子らはその仕留めた野獣や魚の過剰なものよりしか婦人たちには与えなかったろうと思われるからである。それでこれら民族は野獣の放浪するに従って放浪しなければならなかった。そうして、ただ差し当ったその日その日の要求ということだけしか考えなかったのである。その後に人間がもう少し常住一様な栄養品の供給を確保するために、なかんずく必要な野獣を飼い馴らすことを覚えるようになっても、事情はまだ大して変らなかった。ところがこの獣類を飼養するには、季節に応じて変ってゆく牧場を絶えず新たに求める必要があるので、こういう遊牧民の居所は彼らの家畜によって定まることになっていった。決してその逆ではなかったのである。

しかし人口が増殖してきたために、気紛れでなしに本式に土地の耕作をする必要が起るとともに、事情は全くちがってきた。すなわち、固定した住居をもつ必要を生じ、また本来の目的とする収穫を得るための準備として一定の季節にいろいろな野良仕事をしなければならなくなった。しかるに季節の循環は地球に対する太陽の位置の変化によるのであるから、この変化を詳しく知ることが望ましくなってきた。そのうちに間もなく、季節によっていろいろな星の出没の時刻の違うことに気が付き、しかしてこれを正確に観察する方がずっと容易であることを知った。すでに古い昔から、新月と満月との規則正しい交代が、二九・五三日という短い周期で起るので、これが短い期間の時の決定に特に好都合なものとして人間の注意をひいたに相違ない。この周期に基づいて一月の長さを定め、端数を切り上げて三〇日とした。更にこの一ヶ月を各々一〇日ずつの三つの期間に区分した。一年の長さはほぼ一二ヶ月に当るので、最初はこれを三六〇日と定めたのであった。

最も美しきまた最も深き考察より成れる天地創造の諸伝説

最古の文明は、時の決定、すなわち、暦と最も密接な関係をもっている。この決定は非常に規則正しく復帰する各種の周期的現象に基づくものである。既に述べた通り、中でも太陰の光度の交互変化は自然民にとっては最も目に付きやすいものであった。それは比較的短い期間に同一の現象が立帰ってくるために特にそうであったのである。アリアン系の言語では、計量（Mass）、測定する（messen）及び太陰（Mond）の観念を表わす言葉は同一の語根からできている。梵語で太陰をマース（Ms）というが、これは計量者、計量器（der Messer）の意でラテンの月（mensis）及び計量器（mensura）と関係している。我々の国語でのこの言葉もやはり古くここから導かれてきたものである。すなわち、太陰はその規則正しくかつ観察に恰好な光度の輪回のために最初の測定術の出発点を与えた。一方また太陰は昔バビロニア人の間では神々の中での首長と見なされていたものである。ある古い楔形文字で記された古文書に、こんなことがある。

おお、シン（月神）の神よ、汝のみ
ひとり高きよりの光を
汝こそ光を人の世に恵み給わめ、
……
汝が光は、汝の初めの御子なるシャマシュ（太陽）の輝きのごとく麗わしく［#「麗わしく」は底本では「麗しわく」］、
汝が御前には神々も塵の中に横たわる。
おお汝よ、おお運命の支配者よ。

このシン（Sin）というのは月の神で、シャマシュ（Shamash）は太陽神である。紀元前二〇〇〇年ころに至って、初めて、以前にあの木星の支配者であったところの、バビロンでは特別に大事な神様マルドゥクが、シンやシャマシュに取って代わり、自ら太陽神として何よりも崇ばれるようになったのである。

もう少し長い周期が望ましくなっ

目　次

第1章　最古の天文観測――009

宇宙の生成に関する自然民の伝説――010
最低度の自然民には宇宙成立に関する伝説がない／原始物質は通例宇宙創造者より前からあると考えられた

第2章　古代文化的国民の宇宙創造――027

カルデア人の創造伝説――028
その暦と占星術／ユダヤ人の創造説話、天と地に対する彼らの考え／エジプト人の観念

ギリシアの哲学者と中世におけるその後継者――059
泰西の科学は特権僧侶階級の私有物／ギリシアの自然哲学者たち／タレース、アナキシメネス、アナキシマンドロス、ピタゴラス派／ヘラクリトス、エムペドクレス、アナキサゴラス、デモクリトス／自然科学に対するアテン人の嫌忌

第3章　生物を宿す世界の多様性…――078

デカルトの宇宙開闢論――079
渦動説／遊星の形成／地球の進化に関するライブニッツとステノ／デカルト及びニュートンに対するスウェデンボルグの地位／他の世界の可住性に関する諸説

太陽系の力学とその創造に関する学説――079
ニュートンの重力の法則／彗星の行動／天体運動の起源に関するニュートンの意見に対しライブニッツの抗議／ビュッフォンの衝突説

第4章　宇宙開闢説におけるエネルギー観念の導入――097

太陽並びに恒星の輻射の原因に関する古代の諸説――098
マイヤー及びヘルムホルツの考え／リッターの研究／ガス状天体の温度／雰囲気の高さ／

第5章　開闢論における無限の観念――117

空間は無限で時は永久である――118
空間の無限性に関してリーマン及びヘルムホルツ／恒星の数は無限か／暗黒な天体や星雲が天空一面に輝くことを阻止する／物質の不滅

スピノザ及びスペンサーの説――158
ランドルトの実験／エネルギーの不滅／器械的熱学理論／この説の創設者等の説は哲学的基礎の上に立つものである／「熱的死」に関するクラウジウスの考え／死んだ太陽の覚醒に関するカント及びクロルの説／ハーバート・スペンサーの説

はじめに

先年私がスウェーデンの読者界のために著した一書『宇宙の成立』“Das Werden der Welten”（Vrldarnas Utveckling）が非常な好意をもって迎えられたのは誠に感謝に堪えない次第である。その結果として私は旧知あるいは未知の人々からいろいろな質問を受けることになった。これらの質問の多くは、現今に比べると昔は一般に甚だ多様であったところのいろいろの宇宙観の当否に関するものであった。これに答えるには、有史以前から既にとうにすべての思索者たちの興味を惹いていた宇宙進化の諸問題に関するいろいろな考え方の歴史的集成をすれば好都合なわけである。

ところが今度ある別な事情のために、ニュートンの出現以前に行われた宇宙開闢論的観念の歴史的発達を調べるような機縁に立至ったので、このついでにこの方面における私の知識を充実させれば、それによって古来各時代における宇宙関係諸問題に対する見解についての一つのまとまった概念を得ることが可能となった。この仕事は私にとっては多大な興味のあるものであったので、押し付けがましいようではあるが、恐らく一般読者においても、この方面に関する吾人の観照が、野蛮な自然民の当初の幼稚なまとまらない考え方から出発して現代の大規模な思想の殿堂に到達するまでに経由してきた道程について、多少の概念を得ることは望ましいであろうと信じるようになった。ヘッケル（Hckel）が言っているように『ただそれの成り立ち（Werden）によってのみ、成ったもの（das Gewordene）が認識される。現象の真の理解を授け

著者紹介

スワンテ・アウグスト・アーレニウス（Svante August Arrhenius）　一八五九年にウプザラの近くのある土地管理人の息子として生れた。ウプザラ大学で物理学を学び、後にストックホルム大学に移ってそこで溶液の電気伝導度、並びにその化学作用との関係について立ち入った研究をした。一八八七年に発表した電解の理論は真に画期的のものであって、言わば近代物理化学の始祖の一人としての彼の地位を決定するに至ったその基礎を成したものである。その間にドイツやオランダに遊歴して、オストワルト、ヴァントフ、ボルツマンのごとき大家と共同研究を続行しながら次第にこの基礎を固めていった。ギーセン大学からの招聘を辞退して一八九一年故国スウェーデンに帰り、ストックホルム工科大学の講師となり、後にそこの教授となった。一九〇五年にはまたベルリンからの招聘があったがこれも断った。同年にノーベル研究所長となり、一九二七年一〇月二日の最後の日に至るまでその職を保っていた。これより先一九〇三年に彼はその業績のために化学に関するノーベル賞を獲たのであるが、その他にも欧米の諸所の大学や学会から種々の栄誉ある賞や称号を授けられた。

装丁・デザイン――寺田寅彦

宇宙の始まり
史的に見たる科学的宇宙観の変遷
2012年５月10日　第１刷発行

著者　　スワンテ・アウグスト・アーレニウス

印刷

ISBN
©Jiro Nakano 2012 Printed in Japan
落丁、乱丁本、お取り換えいたします。

第1章

最古の天文観測

宇宙の生成に関する自然の伝説

古代文化的国民の宇宙創造に関する諸伝説！

最古の人間は疑いもなく狩猟と漁労によって生活していたであろう。ただ飢餓に迫られ、しかも狩猟の獲物の欠乏のために他の栄養物を求めるような場合に至って、そこで初めて草木の実や、食用に適する根の類をも珍重することを覚えたのであろう。もっともこれらはただ応急のものであって、多分主として婦人たちがそれで間に合わせなければならなかったかも知れない。男子らはその仕留めた野獣や魚の過剰なものよりしか婦人たちには与えなかったろうと思われるからである。それでこれら民族は野獣の放浪するに従って放浪しなければならなかった。そうして、ただ差し当ったその日その日の要求ということだけしか考えなかったのである。その後に人間がもう少し常住一様な栄養品の供給を確保するために、なかんずく必要な野獣を飼い馴らすことを覚えるようになっても、事情はまだ大して変らなかった。ところがこの獣類を飼養するには、季節に応じて変ってゆく牧場を絶えず新たに求める必要があるので、こういう遊牧民の居所は彼らの家畜によって定まることになっていった。決してその逆ではなかったのである。

しかし人口が増殖してきたために、気紛れでなしに本式に土地の耕作をする必要が起るとともに、事情は全くちがってきた。すなわち、固定した住居をもつ必要を生じ、また本来の目的とする収穫を得るための準備として一定の季節にいろいろな野良仕事をしなければならなくなった。しかるに季節の循環は地球に対する太陽の位置の変化によるのであるから、この変化を詳しく知ることが望ましくなってきた。そのうちに間もなく、季節によっていろいろな星の出没の時刻の違うことに気が付き、しかしてこれを正確に観察する方がずっと容易であることを知った。すでに古い昔から、新月と満月との規則正しい交代が、二九・五三日という短い周期で起るので、これが短い期間の時の決定に特に好都合なものとして人間の注意をひいたに相違ない。この周期に基づいて一月の長さを定め、端数を切り上げて三〇日とした。更にこの一ヶ月を各々一〇日ずつの三つの期間に区分した。一年の長さはほぼ一二ヶ月に当るので、最初はこれを三六〇日と定めたのであった。

最も美しきまた最も深き考察より成れる天地創造の諸伝説

最古の文明は、時の決定、すなわち、暦と最も密接な関係をもっている。この決定は非

はじめに

先年私がスウェーデンの読者界のために著した一書『宇宙の成立』〝Das Werden der Welten〟（Vrldarnas Utveckling）が非常な好意をもって迎えられたのは誠に感謝に堪えない次第である。その結果として私は旧知あるいは未知の人々からいろいろな質問を受けることになった。これらの質問の多くは、現今に比べると昔は一般に甚だ多様であったところのいろいろの宇宙観の当否に関するものであった。これに答えるには、有史以前から既にとうにすべての思索者たちの興味を惹いていた宇宙進化の諸問題に関するいろいろな考え方の歴史的集成をすれば好都合なわけである。

ところが今度ある別な事情のために、ニュートンの出現以前に行われた宇宙開闢論的観念の歴史的発達を調べるような機縁に立至ったので、このついでにこの方面における私の知識を充実させれば、それによって古来各時代における宇宙関係諸問題に対する見解についての一つのまとまった概念を得ることが可能となった。この仕事は私にとっては多大な興味のあるものであったので、押し付けがましいようではあるが、恐らく一般読者においても、この方面に関する吾人の観照が、野蛮な自然民の当初の幼稚なまとまらない考え方

から出発して現代の大規模な思想の殿堂に到達するまでに経由してきた道程について、多少の概念を得ることは望ましいであろうと信じるようになった。ヘッケル（Hckel）が言っているように『ただそれの成り立ち（Werden）によってのみ、成ったもの（das Gewordene）が認識される。現象の真の理解を授けるものはただそれの発達の歴史だけである。』

この言葉には多少の誇張はある――たとえば現代の化学を理解するために昔の錬金術者のあらゆる空想を学び知ることは必要としない――しかしともかくも、過去における思考様式を知るということは、我々自身の時代の観照の仕方を見る上に多大の光明を与えるという効果があるのである。

最も興味のあるのは我々現在の観念の萌芽が最古の最不完全な概念形式の中に既に認められることである。これらの観念がその環境の影響を受けながら変遷してきた宿命的経路を追跡してみるとこれらがいかにいろいろの異説と闘ってきたかが分り、また一時はその生長を阻害されることがあっても、やがてまた勢いよく延び立って、その競争者等を日陰に隠し、結局ただ自己独りが生活能力をもつものだという表章を示してきたことを知るであろう。このような歴史的比較研究によって我々の現代の見解の如何に健全であるか、いかに信頼するに足るかということを一層痛切に感得することができるであろう。

この研究からまた現代における発達が未曾有の速度で進行しているということを認めて

目次

第1章　最古の天文観測 009

宇宙の生成に関する自然民の伝説 010
最低度の自然民には宇宙成立に関する伝説がない／原始物質は通例宇宙創造者より前からあると考えられた

第2章　代文化的国民の宇宙創造 027

カルデア人の創造伝説 028
その暦と占星術／ユダヤ人の創造説話、天と地に対する彼らの考え／エジプト人の観念

ギリシアの哲学者と中世におけるその後継者 059
泰西の科学は特権僧侶階級の私有物／ギリシアの自然哲学者たち／タレース、アナキシメネス、アナキシマンドロス、ピタゴラス派／ヘラクリトス、エムペドクレス、アナキサゴラス、デモクリトス／自然科学に対するアテン人の嫌忌

第3章　物を宿す世界の多様性… 078

デカルトの宇宙開闢論 079
渦動説／遊星の形成／地球の進化に関するライブニッツとステノ／デカルト及びニュートンに対するスウェデンボルグの地位／他の世界の可住性に関する諸説

太陽系の力学とその創造に関する学説 079
ニュートンの重力の法則／彗星の行動／天体運動の起源に関するニュートンの意見に対しライブニッツの抗議／ビュッフォンの衝突説

第4章　開闢説におけるエネルギー観念の導入 097

太陽並びに恒星の輻射の原因に関する古代の諸説 098
マイヤー及びヘルムホルツの考え／リッターの研究／ガス状天体の温度／雰囲気の高さ

著者紹介

スワンテ・アウグスト・アーレニウス（Svante August Arrhenius）　一八五九年にウプザラの近くのある土地管理人の息子として生れた。ウプザラ大学で物理学を学び、後にストックホルム大学に移ってそこで溶液の電気伝導度、並びにその化学作用との関係について立ち入った研究をした。一八八七年に発表した電解の理論は真に画期的のものであって、言わば近代物理化学の始祖の一人としての彼の地位を決定するに至ったその基礎を成したものである。その間にドイツやオランダに遊歴して、オストワルト、ヴァントフ、ボルツマンのごとき大家と共同研究を続行しながら次第にこの基礎を固めていった。ギーセン大学からの招聘を辞退して一八九一年故国スウェーデンに帰り、ストックホルム工科大学の講師となり、後にそこの教授となった。一九〇五年にはまたベルリンからの招聘があったがこれも断った。同年にノーベル研究所長となり、一九二七年一〇月二日の最後の日に至るまでその職を保っていた。これより先一九〇三年に彼はその業績のために化学に関するノーベル賞を獲たのであるが、その他にも欧米の諸所の大学や学会から種々の栄誉ある賞や称号を授けられた。

装丁・デザイン――寺田寅彦

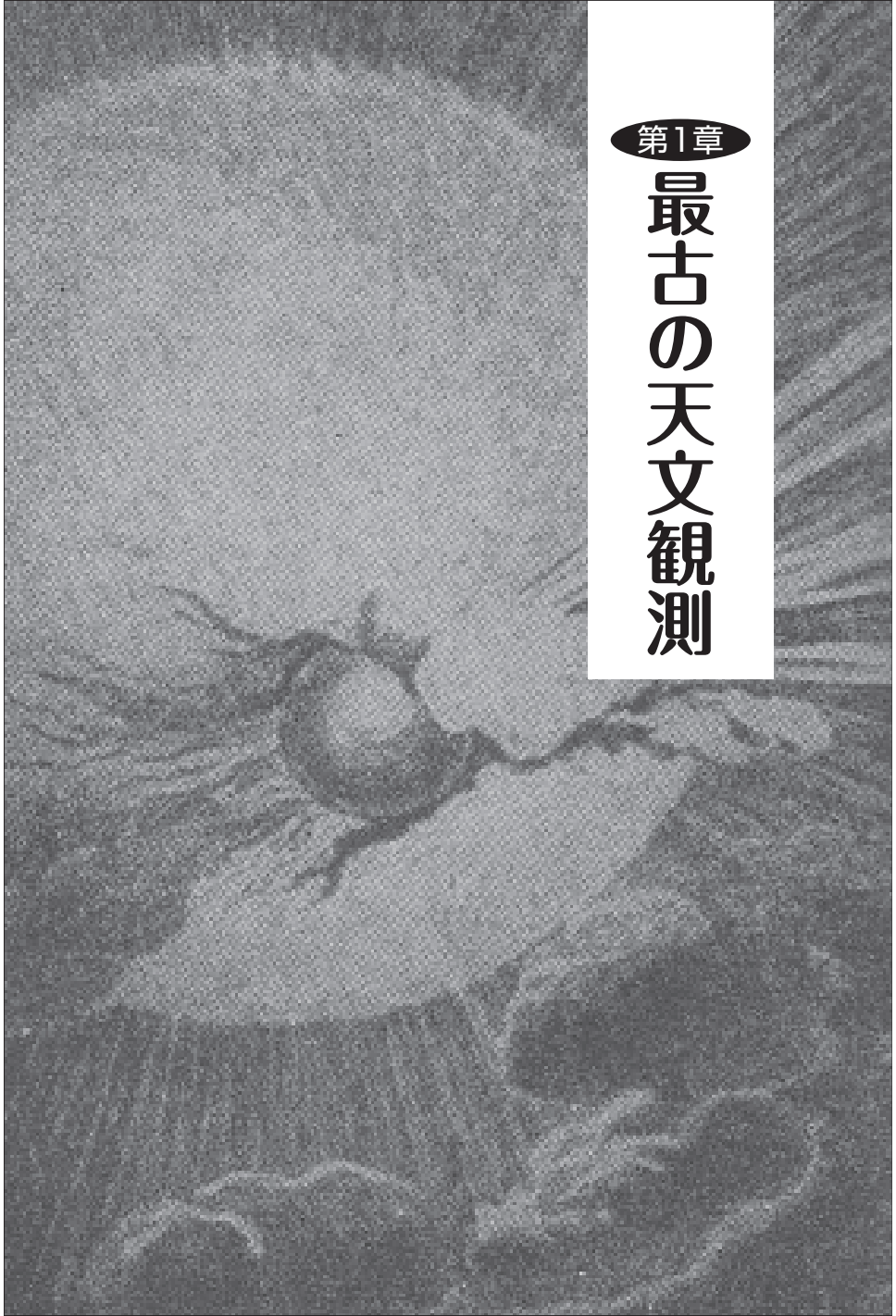
宇宙の始まり
史的に見たる科学的宇宙観の変遷

2012年５月10日　第１刷発行

著者　　スワンテ・アウグスト・アーレニウス

印刷

ISBN
©Jiro Nakano 2012 Printed in Japan
落丁、乱丁本、お取り換えいたします。



第1章

最古の天文観測

宇宙の生成に関する自然民の伝説

古代文化的国民の宇宙創造に関する諸伝説

最古の人間は疑いもなく狩猟と漁労によって生活していたであろう。ただ飢餓に迫られ、しかも狩猟の獲物の欠乏のために他の栄養物を求めるような場合に至って、そこで初めて草木の実や、食用に適する根の類をも珍重することを覚えたのであろう。もっともこれらはただ応急のものであって、多分主として婦人たちがそれで間に合わせなければならなかったかも知れない。そうして、ただ差し当ったその日その日の要求ということだけしか考えなかったのである。その後に人間がもう少し常住一様な栄養品の供給を確保するために、なかんずく必要な野獣を飼い馴らすことを覚えるようになっても、事情はまだ大して変らなかった。ところがこの獣類を飼養するには、季節に応じて変ってゆく牧場を絶えず新たに求める必要があるので、こういう遊牧民の居所は彼らの家畜によって定まることに

なっていった。決してその逆ではなかったのである。

しかし人口が増殖してきたために、気紛れでなしに本式に土地の耕作をする必要が起るとともに、事情は全くちがってきた。すなわち、固定した住居をもつ必要を生じ、また本来の目的とする収穫を得るための準備として一定の季節にいろいろな野良仕事をしなければならなくなった。しかるに季節の循環は地球に対する太陽の位置の変化によるのであるから、この変化を詳しく知ることが望ましくなってきた。そのうちに間もなく、季節によっていろいろな星の出没の時刻の違うことに気が付き、しかしてこれを正確に観察する方がずっと容易であることを知った。すでに古い昔から、新月と満月との規則正しい交代が、二九・五三日という短い周期で起るので、これが短い期間の時の決定に特に好都合なものとして人間の注意をひいたに相違ない。この周期に基づいて一月の長さを定め、端数を切り上げて三〇日とした。更にこの一ヶ月を各々一〇日ずつの三つの期間に区分した。一年の長さはほぼ一二ヶ月に当るので、最初はこれを三六〇日と定めたのであった。

最も美しきまた最も深き考察より成れる天地創造の諸伝説

最古の文明は、時の決定、すなわち、暦と最も密接な関係をもっている。この決定は非常に規則正しく復帰する各種の周期的現象に基づくものである。既に述べた通り、中でも

はじめに

先年私がスウェーデンの読者界のために著した一書『宇宙の成立』"Das Werden der Welten、(Vrldarnas Utveckling) が非常な好意をもって迎えられたのは誠に感謝に堪えない次第である。その結果として私は旧知あるいは未知の人々からいろいろな質問を受けることになった。これらの質問の多くは、現今に比べると昔は一般に甚だ多様であったところのいろいろの宇宙観の当否に関するものであった。これに答えるには、有史以前から既にとうにすべての思索者たちの興味を惹いていた宇宙進化の諸問題に関するいろいろな考え方の歴史的集成をすれば好都合なわけである。

ところが今度ある別な事情のために、ニュートンの出現以前に行われた宇宙開闢論的観念の歴史的発達を調べるような機縁に立至ったので、このついでにこの方面における私の知識を充実させれば、それによって古来各時代における宇宙関係諸問題に対する見解についての一つのまとまった概念を得ることが可能となった。この仕事は私にとっては多大な興味のあるものであったので、押し付けがましいようではあるが、恐らく一般読者においても、この方面に関する吾人の観照が、野蛮な自然民の当初の幼稚なまとまらない考え方

から出発して現代の大規模な思想の殿堂に到達するまでに経由してきた道程について、多少の概念を得ることは望ましいであろうと信じるようになった。ヘッケル (Hckel) が言っているように『ただそれの成り立ち (Werden) によってのみ、成ったもの (das Gewordene) が認識される。現象の真の理解を授けるものはただそれの発達の歴史だけである。』

この言葉には多少の誇張はある——たとえば現代の化学を理解するために昔の錬金術者のあらゆる空想を学び知ることは必要としない——しかしともかくも、過去における思考様式を知るということは、我々自身の時代の観照の仕方を見る上に多大の光明を与えるという効果があるのである。

最も興味のあるのは我々現在の観念の萌芽が最古の最不完全な概念形式の中に既に認められることである。これらの観念がその環境の影響を受けながら変遷してきた宿命的経路を追跡してみるとこれらがいかにいろいろの異説と闘ってきたかが分り、また一時はその生長を阻害されることがあっても、やがてまた勢いよく延び立って、その競争者等を日陰に隠し、結局ただ自己独りが生活能力をもつものだという表章を示してきたことを知るであろう。このような歴史的比較研究によって我々の現代の見解の如何に健全であるか、いかに信頼するに足るかということを一層痛切に感得することができるであろう。

目次

第1章 最古の天文観測 9

宇宙の生成に関する自然民の伝説——10
最低度の自然民には宇宙成立に関する伝説がない／原始物質は通例宇宙創造者より前からあると考えられた

第2章 古代文化的国民の宇宙創造 27

カルデア人の創造伝説——28
その暦と占星術／ユダヤ人の創造説話、天と地に対する彼らの考え／エジプト人の観念

ギリシアの哲学者と中世におけるその後継者——59
泰西の科学は特権僧侶階級の私有物／ギリシアの自然哲学者たち／タレース、アナキシメネス、アナキシマンドロス、ピタゴラス派／ヘラクリトス、エムペドクレス、アナキサゴラス、デモクリトス／自然科学に対するアテン人の嫌忌

第3章 生物を宿す世界の多様性 78

デカルトの宇宙開闢論——79
渦動説／遊星の形成／地球の進化に関するライブニッツとステノ／デカルト及びニュートンに対するスウェデンボルグの地位／他の世界の可住性に関する諸説

太陽系の力学とその創造に関する学説——97
ニュートンの重力の法則／彗星の行動／天体運動の起源に関するニュートンの意見に対しライブニッツの抗議／ビュッフォンの衝突説

第4章 宇宙開闢説におけるエネルギー観念の導入 117

太陽並びに恒星の輻射の原因に関する古代の諸説——118
マイヤー及びヘルムホルツの考え／リッターの研究／ガス状天体の温度／雰囲気の高さ／

著者紹介

スワンテ・アウグスト・アーレニウス（Svante August Arrhenius）　一八五九年にウプザラの近くのある土地管理人の息子として生れた。ウプザラ大学で物理学を学び、後にストックホルム大学に移ってそこで溶液の電気伝導度、並びにその化学作用との関係について立ち入った研究をした。一八八七年に発表した電解の理論は真に画期的のものであって、言わば近代物理化学の始祖の一人としての彼の地位を決定するに至ったその基礎を成したものである。その間にドイツやオランダに遊歴して、オストワルト、ヴァントフ、ボルツマンのごとき大家と共同研究を続行しながら次第にこの基礎を固めていった。ギーセン大学からの招聘を辞退して一八九一年故国スウェーデンに帰り、ストックホルム工科大学の講師となり、後にそこの教授となった。一九〇五年にはまたベルリンからの招聘があったがこれも断った。同年にノーベル研究所長となり、一九二七年一〇月二日の最後の日に至るまでその職を保っていた。これより先一九〇三年に彼はその業績のために化学に関するノーベル賞を獲たのであるが、その他にも欧米の諸所の大学や学会から種々の栄誉ある賞や称号を授けられた。

装丁・デザイン――寺田寅彦

宇宙の始まり
史的に見たる科学的宇宙観の変遷

2012年５月10日　第１刷発行

著者　　スワンテ・アウグスト・アーレニウス

印刷

ISBN
©Jiro Nakano 2012 Printed in Japan
落丁、乱丁本、お取り換えいたします。

第1章

最古の天文観測

開化程度の最も低い人間にとっては暦などというものの必要がなく、従ってまた時の尺度を自然界に求めようと

最古の天文観測

宇宙の生成に関する自然民の伝説

古代文化的国民の宇宙創造に関する諸伝説

最古の人間は疑いもなく狩猟と漁労によって生活していたであろう。ただ飢餓に迫られ、しかも狩猟の獲物の欠乏のために他の栄養物を求めるような場合に至って、そこで初めて草木の実や、食用に適する根の類をも珍重することを覚えたのであろう。もっともこれらはただ応急のものであって、多分主として婦人たちがそれで間に合わせなければならなかったかも知れない。男子らはその仕留めた野獣や魚の過剰なものよりしか婦人たちには与えなかったろうと思われるからである。それでこれら民族は野獣の放浪するに従って放浪しなければならなかった。そうして、ただ差し当ったその日その日の要求ということだけしか考えなかったのである。その後に人間がもう少し常住一様な栄養品の供給を確保するために、なかんずく必要な野獣を飼い馴らすことを覚えるようになっても、事情はまだ大して変らなかった。ところがこの獣類を飼養するには、季節に応じて変ってゆく牧場を絶えず新たに求める必要があるので、こういう遊牧民の居所は彼らの家畜によって定まることになっていった。決してその逆ではなかったのである。

しかし人口が増殖してきたために、気紛れでなしに本式に土地の耕作をする必要が起るとともに、事情は全くちがってきた。すなわち、固定した住居をもつ必要を生じ、また本来の目的とする収穫を得るための準備として一定の季節にいろいろな野良仕事をしなければならなくなった。しかるに季節の循環は地球に対する太陽の位置の変化によるのであるから、この変化を詳しく知ることが望ましくなってきた。そのうちに間もなく、季節によっていろいろな星の出没の時刻の違うことに気が付き、しかしてこれを正確に観察する方がずっと容易であることを知った。すでに古い昔から、新月と満月との規則正しい交代が、二九・五三日という短い周期で起るので、これが短い期間の時の決定に特に好都合なものとして人間の注意をひいたに相違ない。この周期に基づいて一月の長さを定め、端数を切り上げて三〇日とした。更にこの一ヶ月を各々一〇日ずつの三つの期間に区分した。一年の長さはほぼ一二ヶ月に当るので、最初はこれを三六〇日と定めたのであった。

最も美しきまた最も深き考察より成れる天地創造の諸伝説

最古の文明は、時の決定、すなわち、暦と最も密接な関係をもっている。この決定は非常に規則正しく復帰する各種の周期的現象に基づくものである。既に述べた通り、中でも太陰の光度の交互変化は自然民にとっては最も目に付きやすいものであった。それは比較的短い期間に同一の現象が立帰ってくるために特にそうであったのである。アリアン系の言語では、計量（Mass）、測定する（messen）及び太陰（Mond）の観念を表わす言葉は同一の語根からできている。梵語で太陰をマース（Ms）というが、これは計量者、計量器（der Messer）の意でラテンの月（mensis）及び計量器（mensura）と関係している。我々の国語でのこの言葉もやはり古くここから導かれてきたものである。すなわち、太陰はその規則正しくかつ観察に恰好な光度の輪回のために最初の測定術の出発点を与えた。一方また太陰は昔バビロニア人の間では神々の中での首長と見なされていたものである。ある古い楔形文字で記された古文書に、こんなことがある。

おお、シン（月神）の神よ、汝のみひとり高きよりの光を
汝こそ光を人の世に恵み給わめ、
……

はじめに

先年私がスウェーデンの読者界のために著した一書『宇宙の成立』〝Das Werden der Welten〟（Vrldarnas Utveckling）が非常な好意をもって迎えられたのは誠に感謝に堪えない次第である。その結果として私は旧知あるいは未知の人々からいろいろな質問を受けることになった。これらの質問の多くは、現今に比べると昔は一般に甚だ多様であったところのいろいろの宇宙観の当否に関するものであった。これに答えるには、有史以前から既にとうにすべての思索者たちの興味を惹いていた宇宙進化の諸問題に関するいろいろな考え方の歴史的集成をすれば好都合なわけである。

ところが今度ある別な事情のために、ニュートンの出現以前に行われた宇宙開闢論的観念の歴史的発達を調べるような機縁に立至ったので、このついでにこの方面における私の知識を充実させれば、それによって古来各時代における宇宙関係諸問題に対する見解についての一つのまとまった概念を得ることが可能となった。この仕事は私にとっては多大な興味のあるものであったので、押し付けがましいようではあるが、恐らく一般読者においても、この方面に関する吾人の観照が、野蛮な自然民の当初の幼稚なまとまらない考え方

から出発して現代の大規模な思想の殿堂に到達するまでに経由してきた道程について、多少の概念を得ることは望ましいであろうと信じるようになった。ヘッケル（Hckel）が言っているように『ただそれの成り立ち（Werden）によってのみ、成ったもの（das Gewordene）が認識される。現象の真の理解を授けるものはただそれの発達の歴史だけである。』

この言葉には多少の誇張はある――たとえば現代の化学を理解するために昔の錬金術者のあらゆる空想を学び知ることは必要としない――しかしともかくも、過去における思考様式を知るということは、我々自身の時代の観照の仕方を見る上に多大の光明を与えるという効果があるのである。

最も興味のあるのは我々現在の観念の萌芽が最古の最不完全な概念形式の中に既に認められることである。これらの観念がその環境の影響を受けながら変遷してきた宿命的経路を追跡してみるとこれらがいかにいろいろの異説と闘ってきたかが分り、また一時はその生長を阻害されることがあっても、やがてまた勢いよく延び立って、その競争者等を日陰に隠し、結局ただ自己独りが生活能力をもつものだという表章を示してきたことを知るであろう。このような歴史的比較研究によって我々の現代の見解の如何に健全であるか、いかに信頼するに足るかということを一層痛切に感得することができるであろう。

この研究からまた現代における発達が未曾有の速度で進行しているということを認めて

目次

第1章　最古の天文観測 009

宇宙の生成に関する自然民の伝説 010

最低度の自然民には宇宙成立に関する伝説がない／原始物質は通例宇宙創造者より前からあると考えられた

第2章　古代文化的国民の宇宙創造 027

カルデア人の創造伝説 028

その暦と占星術／ユダヤ人の創造説話、天と地に対する彼らの考え／エジプト人の観念

ギリシアの哲学者と中世におけるその後継者 059

泰西の科学は特権僧侶階級の私有物／ギリシアの自然哲学者たち／タレース、アナキシメネス、アナキシマンドロス、ピタゴラス派／ヘラクリトス、エムペドクレス、アナキサゴラス、デモクリトス／自然科学に対するアテン人の嫌忌

第3章　生物を宿す世界の多様性 078

デカルトの宇宙開闢論 079

渦動説／遊星の形成／地球の進化に関するライブニッツとステノ／デカルト及びニュートンに対するスウェデンボルグの地位／他の世界の可住性に関する諸説

太陽系の力学とその創造に関する学説 079

ニュートンの重力の法則／彗星の行動／天体運動の起源に関するニュートンの意見に対しライブニッツの抗議／ビュッフォンの衝突説

第4章　宇宙開闢説における エネルギー観念の導入 097

太陽並びに恒星の輻射の原因に関する古代の諸説 098

マイヤー及びヘルムホルツの考え／リッターの研究／ガス状天体の温度／雰囲気の高さ

著者紹介

スワンテ・アウグスト・アーレニウス（Svante August Arrhenius）　一八五九年にウプザラの近くのある土地管理人の息子として生れた。ウプザラ大学で物理学を学び、後にストックホルム大学に移ってそこで溶液の電気伝導度、並びにその化学作用との関係について立ち入った研究をした。一八八七年に発表した電解の理論は真に画期的のものであって、言わば近代物理化学の始祖の一人としての彼の地位を決定するに至ったその基礎を成したものである。その間にドイツやオランダに遊歴して、オストワルト、ヴァントフ、ボルツマンのごとき大家と共同研究を続行しながら次第にこの基礎を固めていった。ギーセン大学からの招聘を辞退して一八九一年故国スウェーデンに帰り、ストックホルム工科大学の講師となり、後にそこの教授となった。一九〇五年にはまたベルリンからの招聘があったがこれも断った。同年にノーベル研究所長となり、一九二七年一〇月二日の最後の日に至るまでその職を保っていた。これより先一九〇三年に彼はその業績のために化学に関するノーベル賞を獲たのであるが、その他にも欧米の諸所の大学や学会から種々の栄誉ある賞や称号を授けられた。

装丁・デザイン――寺田寅彦

宇宙の始まり
史的に見たる科学的宇宙観の変遷

2012年５月10日　第１刷発行

著者　　スワンテ・アウグスト・アーレニウス

印刷

ISBN
©Jiro Nakano 2012 Printed in Japan

落丁、乱丁本、お取り換えいたします。

源氏物語

紫式部

はじめに

光君がおかくれになったあとに、そのすぐれた美貌を継ぐと見える人は多くの遺族の中にも求めることが困難であった。院の陛下はおそれおおくて数に引きたてまつるべきでない。今の帝の第三の宮と、同じ六条院で成長した朱雀院の女三の宮の若君の二人がとりどりに美貌の名を取っておいでになって、実際すぐれた貴公子でおありになったが、光源氏がそうであったようにまばゆいほどの美男というのではないようである。ただ普通の人としてはまことにりっぱで艶な姿の備わっている方たちである上に、あらゆる条件のそろった身分でおありになることも、光源氏にやや過ぎていて、人々の尊敬している心が実質以上に美なる人、すぐれた人にする傾向があった。紫夫人が特に愛してお育てした方であったから、三の宮は二条の院に住んでおいでになるのである。むろん東宮は特別な方として御大切にあそばすのであるが、帝もお后もこの三の宮を非常にお愛しになって、御所の中へお住居の御殿も持たせておありになるが、宮はそれよりも気楽な自邸の生活をお喜びになって、二条の院におおかたはおいでになるのであった。御元服後は三の宮を兵部卿の宮と申し上げるのであった。女一の宮は六条院の南の町の東の対を、昔のとおりに部屋の模様変えもあそばされずに住んでおいでになって、明け暮れ昔の美しい養祖母の女王を恋しがっておいでになった。二の宮も同じ六条院の寝殿を時々行ってお休みになる所にあそばして、御所では梅壺をお住居に使っておいでになったが、右大臣の二女をお嫁りになっていた。次の太子に擬せられておいでになる方で、臣下が御尊敬申していることも並み並みでなくて、その御人格も堅実な方であった。

源右大臣には何人もの令嬢があって、長女は東宮に侍していて、競争者もないよい位置を得ているのである。下の令嬢はまた順序どおりに三の宮がお嫁りになるのであろうと世間も見ているし、中宮もそのお心でおありになるのであるが、兵部卿の宮にそのお心がないのである。恋愛結婚でなければいやであると思っておいでになるふうなのであった。夕霧の大臣も同じように娘たちを御兄弟の宮方に嫁がせることを世間へはばかっているのであったが、もし懇望されるなら同意をするのに躊躇はしないというふうを見せて、兵部卿の宮に十分の好意を見せていた。大臣の六女は現在における自信のある貴公子の憧憬の的になっていた。

六条院がおいでにならぬようになってから、夫人がたは皆泣く泣くそれぞれの家へ移ってしまったのであって、花散里といわれた夫人は遺産として与えられた東の院へ行ったのであった。中宮は大部分宮中においでになったから、院の中は寂しく人少なになったのを、夕霧の右大臣は、

平成00年０月

紫式部

目次

はじめに 2

第14帖 澪標 7
～みおつくし～
源氏28歳冬～ 29歳

第15帖 蓬生 17
～よもぎう～
源氏28歳～ 29歳

第16帖 関屋 27
～せきや～
源氏29歳秋

第17帖 絵合 37
～えあわせ～
源氏31歳春

第18帖 松風 47
～まつかぜ～
源氏31歳秋

第19帖 薄雲 57
～うすぐも～
源氏31歳冬～ 32歳秋

第20帖 朝顔（槿） 67
～あさがお～
源氏32歳秋～冬

第21帖 少女 77
～おとめ～
源氏33歳～ 35歳

第22帖 玉鬘 87
～たまかずら～
源氏35歳

第23帖 初音 97
～はつね～
源氏36歳正月

第24帖 胡蝶 107
～こちょう～
源氏36歳春～夏

第25帖 蛍 117
～ほたる～
源氏36歳夏

第26帖 常夏 127
～とこなつ～
源氏36歳夏

第27帖 篝火 137
～かがりび～
源氏36歳秋

第28帖 野分 147
～のわき～
源氏36歳秋

第52帖

浮舟

～薫27歳・春～

第52話　浮舟

兵部卿の宮は美しい人をほのかに御覧になったあの秋の夕べのことをどうしてもお忘れになることができなかった。たいした貴族の娘ではないらしかったが婉嬋とした美貌の人であったと、好色な方であったから、それきり消えるようにいなくなってしまったことを残念でたまらぬように思召しては、夫人に対しても、

「何でもない恋の遊戯をしようとするくらいのことにもあなたはよく嫉妬する、そんな人とは思わなかったのに」

こんなふうにお言いになり、怨みをお洩らしになるおりおり、中の君は苦しくてありのままのことを言ってしまおうとも思わないではなかったが、妻の一人としての待遇はしていないにもせよ軽々しい情人とは思わずに愛して、世間の目にはつかぬようにと宇治へ隠してある妹の姫君のことを、お話ししても宮の御性情ではそのままにしてお置きにはなれまい、女房にでもそうした関係を結びたくおなりになった人の所へは無反省にそうした人の実家へまでもお出かけになるような多情さがおありになるのであるから、これはまして相当に月日もたつ今になっても思い込んでお忘れになれない相手であっては、必ず醜い事件をお起こしになるであろう、ほかから聞いておしまいになればそれはしかたがない、大将のためにも姫君のためにも不幸になるのを知っておいでになっても、それに遠慮のおできになる方ではないから、そうした場合に姫君が他人でない点で、自分は多く恥を覚えることであろう、何にもせよ自分のあやまりから悪いほうへ運命の進む動機は作る

まいと反省して、宮の恋に同情はしながらも姫君の現在の境遇を語ろうとしなかった。上手な嘘で繕うことはできない性質であったから、表面は良人を恨み、深い嫉妬を内に抱いている世間並みの妻に見られているほかはなかった。

薫の大将は恋人を信じて逢うことにあせりもせず、待ち遠に思うであろうと心苦しく思いやりながらも、行動の人目につきやすい大官になっている身では、何かの名目ができなくては行きにくい宇治の道であった。「恋しくば来ても見よかし千早振る神のいさむる道ならなくに」と抽象的に言われたその道よりもこの道のほうが困難であると言わねばならない。けれどもそのうちに自分は十分にその人をいたわる方法を考えている、宇治へ行って見る時に覚える憂鬱を消すためにその人を置いておきたいと思ったのが最初の考えなのであるから、しばらく滞留していてよい口実を作り、近いうちにゆるりとした気持ちで行って逢おう、そうして当分は隠れた妻としておき、彼女の心にも不安を感じさせないようにしてやり、自分のために非難の声が高く起こらないふうにして妻であることを自然に世間へ認めさせるのがよいであろう、にわかにだれの娘か、いつからというようなことを私議されるのも煩わしく初めの精神と違ってくる、また二条の院の女王に聞かれても、思い出の山荘から、身代わりの人さえ得ればよかったのであるというようにつれて出て、昔をもう念頭に置いていないように見えるのも不本意であると思い、恋しい心をおさえているのも、例の恋に呑気な性質だったからであろう。しかし京へ迎える家は用意して、忍んで作らせていた。少し心の暇が少なくなったようであるがなお二条の院の夫人に尽くすことは怠らなかった。これ

を知っている女房などは不思議にも思うのであったが、世の中というものがようやくわかってきた中の君にはこうした薫の誠意が認識できるようになり、これこそ恋した人を死後までも長く忘れない深い愛の例にもすべき志であると哀れを覚えさせられることも少なくないのであった。世の信望を得ていることも多くて、官位の昇進の目ざましい薫であったから、宮があまりにも真心のない態度をお見せになったりする時には、不運な自分である、姉君の心にきめたままにはなっていないで、陰で多くの煩悶をせねばならぬ妻になっていると、こんなことも思われた。けれども逢って話などをすることはもうあまりできないようになっていた。宇治時代と今とはあまりにも年月が隔たり過ぎ、どんな情誼を結んでいる二人であるとも知らぬ人は、身分のない人たちの間では世話になった、世話をしたというくらいのことでいつまでも親しみ合っていて、それが穏当に見える、こうした高い貴族の中では例のないことであるなどと誹謗するかもしれぬという遠慮もあり、宮が続いてこの交情に疑いを持っておいでになるのが今になっていよいよ煩わしく思われもする心から、自然うとうとしいふうを見せていくようになったのであるが、薫のほうではそれにもかかわらず、好意を持ち続けた。宮も多情な御性質がわざわいして情けなく夫人をお思わせになるようなことも時々はまじるが若君がかわいく成長してくるのを御覧になっては、他の人から自分の子は生まれないかもしれぬと思召し、夫人を尊重あそばすようになり、隔てのない妻としてはだれよりもお愛しになるため、以前よりは少し物思いをすることの少ない日を中の君は送っていた。

正月の元日の過ぎたあとで宮は二条の院へ来ておいでになって、

歳の一つ加わった若君をそばへ置き愛しておいでになった。午ごろであるが、小さい童女が緑の薄様の手紙の大きい形のと、小さい髭籠を小松につけたのと、また別の立文の手紙とを持ち、むぞうさに走って来て夫人の前へそれを置いた。宮が、

「それはどこからよこしたのか」

とお言いになった。

「宇治から大輔さんの所に差し上げたいと言ってまいりました使いが、うろうろとしているのを見たものですから、いつものように大輔さんがまた奥様へお目にかけるお手紙だろうと思いまして、私、受け取ってまいりました」

せかせかと早口で申した。

「この籠は金の箔で塗った籠でございますね、松もほんとうのものらしくできた枝ですわ」

うれしそうな顔で言うのを御覧になって、宮もお笑いになり、

「では私もどんなによくできているかを見よう」

おわりに

薫は山の延暦寺に着いて、常のとおりに経巻と仏像の供養を営んだ。横川の寺へは翌日行ったのであるが、僧都は大将の親しい来駕を喜んで迎えた。これまでからも祈祷に関した用でつきあっていたのであるが、特に親しいという間柄にはなっていなかったところが、今度の一品の宮の御病気の際に、この僧都が修法を申し上げて著るしい効果を上げたのを見た時から、大きな尊敬を払うようになって、以前に増した交情を生じたために、重々しい身でわざわざこの山寺へ訪ねて来てくれたとしてあらんかぎりの歓待をした。ゆるりと落ち着いて話などをしている客に湯漬けなどが出された。あたりのやや静かになったころ、

「小野の辺にお知り合いの所がありますか」

と薫は尋ねた。

「そうです。それは古くなった家なのでございます。私に朽尼とも申すべき母がありまして、京にたいした邸があるのでもありませんから、私が寺にこもっております間は、近くに来ておれば夜中でも暁でも何かの時に私が役だつことになるかと思いまして小野に住ませてあるのでございます」

「あの辺は近年まで住宅も相応にあったそうですが、このごろは家が少なくなったそうですね」

と言ったあとで、薫は座を進めて低い声になり、

「確かなこととも思われませんし、またあなたへお尋ねしましては、なぜ私がそれを深く知ろうとするのかと不思議にお思いになるであろうしとはばかられるのですが、その山里のお家《うち》で私に関係のある人がお世話になっているということを聞きましたが、事実であるとすれば、そうなるまでの経路などもお話し申しておきたいと考えていましたうちに、あなたのお弟子にしていただいて尼の戒を授けられたということが伝わってきましたが、真実でしょうか。まだ年も若くて親などもある人ですから、私の行き届かない所からなくしたように恨まれてもしかたのない人なのですが」

と薫は言った。僧都は予期のとおりあの人はただの家の娘ではなかった。貴女であろうとは初めから考えられたことであった。自身で来てこれほどに言っておられる人であれば、深く愛された人に違いないと思うと、自分は僧であるにせよ、あまりに分別なくあの人の望みにまかせて出家をさせてしまったものであると胸がふさがり、返辞をどうすれば障りなく聞こえるであろうと考えられるのであった。事実をもう皆知っておられるらしい、これだけのことがすでにわかっている上で、探りにかかられては何も何も暴露してしまうはずである、隠してはかえって迷惑が起こるであろうという結論を僧都は得て、

「どういうことでこんなことが起こりましたかと、昨年来不思議にばかり思われていました方のことかと思われます」

平成00年０月

紫式部

■著者略歴

紫式部

むらさきしきぶ・生没年不詳
平安時代中期の女性作家、歌人。『源氏物語』の作者と考えられている。中古三十六歌仙、女房三十六歌仙の一人。『小倉百人一首』にも「めぐりあひて 見しやそれとも わかぬまに 雲がくれにし 夜半の月かな」で入選。
屈指の学者、詩人である藤原為時の娘。藤原宣孝に嫁ぎ、一女（大弐三位）を産んだ。夫の死後、召し出されて一条天皇の中宮・藤原彰子に仕えている間に、『源氏物語』を記した。

源氏物語

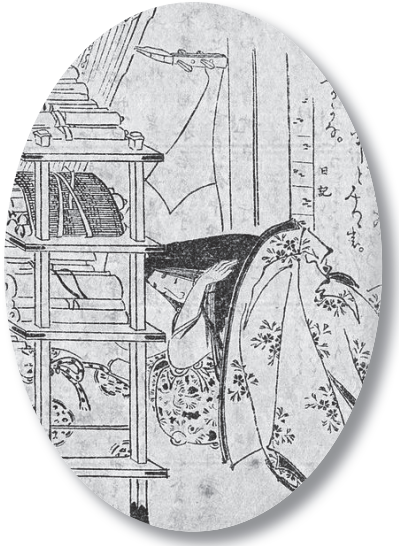
2099年99月99日　初版発行

著　者：紫式部
発　行：紫式部
〒101-0001　東京都○○○○○1-2-3
DTP制作：○○○○○
印刷・製本：○○○○○

本書の無断複写・複製（コピー等）は著作権法上の例外を除き、禁じられています。購入者以外の第三者による電子データ化及び電子書籍化は、私的使用を含め一切認められておりません。

©2099 MURASAKISIKIBU
ISBN978-4-9999-9999-0　　Printed in Japan

源氏物語



紫式部

はじめに

どの天皇様の御代であったか、女御とか更衣とかいわれる後宮がおおぜいいた中に、最上の貴族出身ではないが深い御一愛寵を得ている人があった。最初から自分こそはという自信と、親兄弟の勢力に恃む所があって宮中にはいった女御たちからは失敬な女としてねたまれた。その人と同等、もしくはそれより地位の低い更衣たちはまして嫉妬の焔を燃やさないわけもなかった。夜の御殿の宿直所から退る朝、続いてその人ばかりが召される夜、目に見耳に聞いて口惜しがらせた恨みのせいもあったかからだが弱くなって、心細くなった更衣は多く実家へ下がっていがちということになると、いよいよ帝はこの人にばかり心をお引かれになるという御様子で、人が何と批評をしようともそれに御遠慮などというものがおできにならない。御聖徳を伝える歴史の上にも暗い影の一所残るようなことにもなりかねない状態になった。高官たちも殿上役人たちも困って、御一覚醒になるのを期しながら、当分は見ぬ顔をしていたいという態度をとるほどの御一寵愛ぶりであった。唐の国でもこの種類の寵姫、楊家の女の出現によって乱が醸されたなどと蔭ではいわれる。今やこの女性が一天下の煩いだとされるに至った。馬嵬の駅がいつ再現されるかもしれぬ。その人にとっては堪えがたいような苦しい雰囲気の中でも、ただ深い御愛情だけをたよりにして暮らしていた。父の大納言はもう故人であった。母の未亡人が生まれのよい見識のある女で、わが娘を現代に勢力のある派手な家の娘たちにひけをとら

せないよき保護者たりえた。それでも大官の後援者を持たぬ更衣は、何かの場合にいつも心細い思いをするようだった。

前生の縁が深かったか、またもないような美しい皇子までがこの人からお生まれになった。寵姫を母とした御子を早く御覧になりたい思召しから、正規の日数が立つとすぐに更衣一母子を宮中へお招きになった。小皇子はいかなる美なるものよりも美しいお顔をしておいでになった。帝の第一皇子は右大臣の娘の女御からお生まれになって、重い外戚が背景になっていて、疑いもない未来の皇太子として世の人は尊敬をささげているが、第二の皇子の美貌にならぶことがおできにならぬため、それは皇家の長子として大事にあそばされ、これは御自身の愛子として非常に大事がっておいでになった。更衣は初めから普通の朝廷の女官として奉仕するほどの軽い身分ではなかった。ただお愛しになるあまりに、その人自身は最高の貴女と言ってよいほどのりっぱな女ではあったが、始終おそばへお置きになろうとして、殿上で音楽その他のお催し事をあそばす際には、だれよりもまず先にこの人を常の御殿へお呼びになり、またある時はお引き留めになって更衣が夜の御殿から朝の退出ができずそのまま昼も侍しているようなことになったりした。

平成00年0月

紫式部

目次

はじめに 2

第1帖 桐壺～きりつぼ～ 源氏誕生～12歳 7

第2帖 帚木～ははきぎ～ 源氏17歳夏 00

第3帖 空蝉～うつせみ～ 源氏17歳夏 00

第4帖 夕顔～ゆうがお～ 源氏17歳秋～冬 00

第5帖 若紫～わかむらさき～ 源氏18歳 00

第6帖 末摘花～すえつむはな～ 源氏18歳春～19歳春 00

第7帖 紅葉賀～もみじのが～ 源氏18歳秋～19歳秋 00

第8帖 花宴～はなのえん～ 源氏20歳春 00

第9帖 葵～あおい～ 源氏22歳～23歳春 00

第10帖 賢木～さかき～ 源氏23歳秋～25歳夏 00

第11帖 花散里～はなちるさと～ 源氏25歳夏 00

第12帖 須磨～すま～ 源氏26歳春～27歳春 00

第13帖 明石～あかし～ 源氏27歳春～28歳秋 00

第五帖

若紫

〜源氏18歳〜

第五帖　若紫

源氏は瘧病にかかっていた。いろいろとまじないもし、僧の加持も受けていたが効験がなくて、この病の特徴で発作的にたびたび起こってくるのをある人が、

「北山の某という寺に非常に上手な修験僧がおります、去年の夏この病気がはやりました時など、まじないも効果がなく困っていた人がずいぶん救われました。病気をこじらせますと癒りにくくなりますから、早くためしてごらんになったらいいでしょう」

こんなことを言って勧めたので、源氏はその山から修験者を自邸へ招こうとした。

「老体になっておりまして、岩窟を一歩出ることもむずかしいのですから」

僧の返辞はこんなだった。

「それではしかたがない、そっと微行で行ってみよう」

こう言っていた源氏は、親しい家司四、五人だけを伴って、夜明けに京を立って出かけたのである。郊外のやや遠い山である。これは三月の三十日だった。京の桜はもう散っていたが、途中の花はまだ盛りで、山路を進んで行くにしたがって渓々をこめた霞にも都の霞にない美があった。窮屈な境遇の源氏はこうした山歩きの経験がなくて、何事も皆珍しくおもしろく思われた。修験僧の寺は身にしむような清さがあって、高い峰を負った巌窟の中に聖人ははいっていた。

源氏は自身のだれであるかを言わず、服装をはじめ思い切って簡単にして来ているのであるが、迎えた僧は言った。

「あ、もったいない、先日お召しになりました方様でいらっしゃいましょう。もう私はこの世界のことは考えないものですから、修験の術も忘れておりますのに、どうしてまあわざわざおいでくだすったのでしょう」

驚きながらも笑を含んで源氏を見ていた。非常に偉い僧なのである。源氏を形どった物を作って、瘧病をそれに移す祈祷をした。加持などをしている時分にはもう日が高く上っていた。

源氏はその寺を出て少しの散歩を試みた。その辺をながめると、ここは高い所であったから、そこここに構えられた多くの僧坊が見渡されるのである。螺旋状になった路のついたこの峰のすぐ下に、それもほかの僧坊と同じ小柴垣ではあるが、目だってきれいに廻らされていて、よい座敷風の建物と廊とが優美に組み立てられ、庭の作りようなどもきわめて凝った一構えがあった。

「あれはだれの住んでいる所なのかね」

と源氏が問うた。

「これが、某一僧都がもう二年ほど引きこもっておられる坊でございます」

「そうか、あのりっぱな僧都、あの人の家なんだね。あの人に知れてはきまりが悪いね、こんな体裁で来ていて」

などと、源氏は言った。美しい侍童などがたくさん庭へ出て来て仏の閼伽棚に水を盛ったり花を供

えたりしているのもよく見えた。

「あすこの家に女がおりますよ。あの僧都がよもや隠し妻を置いてはいらっしゃらないでしょうが、いったい何者でしょう」

こんなことを従者が言った。崖を少しおりて行ってのぞく人もある。美しい女の子や若い女房やら召使の童女やらが見えると言った。

源氏は寺へ帰って仏前の勤めをしながら昼になるともう発作が起こるころであるがと不安だった。

「気をお紛らしになって、病気のことをお思いにならないのがいちばんよろしゅうございますよ」

などと人が言うので、後ろのほうの山へ出て今度は京のほうをながめた。ずっと遠くまで霞んでいて、山の近い木立ちなどは淡く煙って見えた。

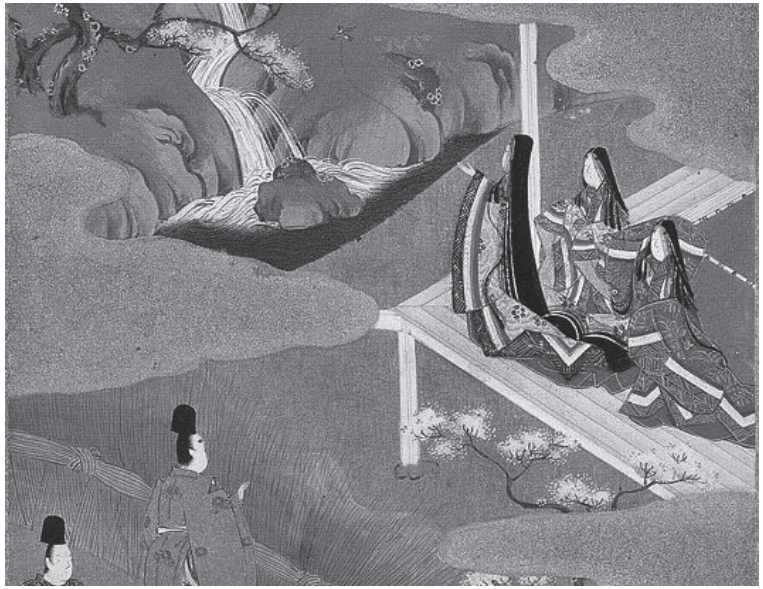
「絵によく似ている。こんな所に住めば人間の穢い感情などは起こしようがないだろう」

と源氏が言うと、

「この山などはまだ浅いものでございます。地方の海岸の風景や山の景色をお目にかけましたら、その自然からお得になるところがあって、絵がずいぶん御上達なさいますでしょうと思います。富士、それから何々山」

こんな話をする者があった。また西のほうの国々のすぐれた風景を言って、浦々の名をたくさん並べ立てる者もあったりして、だれも皆病への関心から源氏を放そうと努めているのである。

「近い所では播磨の明石の浦がよろしゅうございます。特別に変わったよさはありませんが、ただそ



こから海のほうをながめた景色はどこよりもよく纏っております。前播磨守入道が大事な娘を住ませてある家はたいしたものでございます。二代ほど前は大臣だった家筋で、もっと出世すべきはずの人なんですが、変わり者で仲間の交際なんかをもきらって近衛の中将を捨てて自分から願って出てなった播磨守なんですが、国の者に反抗されたりして、こんな不名誉なことになっては京へ帰れないと言って、その時に入道した人ですが、坊様になったのなら坊様らしく、深い山のほうへでも行って住めばよさそうなものですが、名所の明石の浦などに邸宅を構えております。播磨にはずいぶん坊様に似合った山なんかが多いのですがね、変わり者をてらってそうするかというとそれにも訳はあるのです。若い妻子が寂しがるだろうという思いやりなのです。そんな意味でずいぶん贅沢に住居なども作ってございます。先日父の所へま

おわりに

春の光を御覧になっても、六条院の暗いお気持ちが改まるものでもないのに、表へは新年の賀を申し入れる人たちが続いて参入するのを院はお加減が悪いようにお見せになって、御簾の中にばかりおいでになった。兵部卿の宮のおいでになった時にだけはお居間のほうでお会いになろうという気持ちにおなりになって、まず歌をお取り次がせになった。

わが宿は　花もてはやす　人もなし　何にか春の　訪ねきつらん

宮は涙ぐんでおしまいになって、

香をとめて　来つるかひなく　おほかたの　花の便りと　言ひやなすべき

と返しを申された。紅梅の木の下を通って対のほうへ歩いておいでになる宮の、御一風采のなつかしいのを御覧になっても、今ではこの人以外に紅梅の美と並べてよい人も存在しなくなったのであると院はお思いになった。花はほのかに開いて美しい紅を見せていた。音楽の遊びをされるのでもなく、

常の新春に変わったことばかりであった。

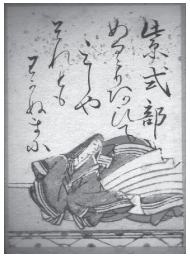
女房なども長く夫人に仕えた者はまだ喪服の濃い色を改めずにいて、なお醒ましがたい悲しみにおぼれていた。他の夫人たちの所へお出かけになることがなくて、院が常にこちらでばかり暮らしておいでになることだけを皆慰めにしていた。これまで執心がおありになるのでもなく、時々情人らしくお扱いになった人たちに対しては独居をあそばすようになってからはかえって冷淡におなりになって、他の人たちへのごとく主従としてお親しみになるだけで、夜もだれかれと幾人も寝室へ侍らせて、御退屈さから夫人の在世中の話などをあそばしたりした。次第に恋愛から超越しておしまいになった院は、まだこうした純粋なお心になれなかった時代に、怨めしそうな様子がおりおり夫人に見えたことなどもお思い出しになって、なぜ戯れ事にせよ、また運命がしからしめたにせよ、そうした誘惑に自分が打ち勝ちえないで、あの人を苦しめたのであろう、聡明な人であったから、十分の理解は持っていながらも、あくまで怨みきるということはなくて、どの人と交渉の生じた場合にも一度ずつはどうなることかと不安におびえたふうが見えたと院は回顧あそばされて、そうした煩悶を女王にさせたことを後悔される思いが胸からあふれ出るようにお感じになるのであった。

平成00年0月

紫式部名

■著者略歴

紫式部



むらさきしきぶ、生没年不詳。
平安時代中期の女性作家、歌人。『源氏物語』の作者と考えられている。中古三十六歌仙、女房三十六歌仙の一人。『小倉百人一首』にも「めぐりあひて 見しやそれとも わかぬまに 雲がくれにし 夜半の月かな」で入選。
屈指の学者、詩人である藤原為時の娘。藤原宣孝に嫁ぎ、一女（大弐三位）を産んだ。夫の死後、召し出されて一条天皇の中宮・藤原彰子に仕えている間に、『源氏物語』を記した。

源氏物語

2099年99月99日　初版発行

著　　者：　紫式部
発　　行：　紫式部
〒101-0001　東京都○○○○○1-2-3
ＤＴＰ制作：　○○○○○
印刷・製本：　○○○○○

本書の無断複写・複製（コピー等）は著作権法上の例外を除き、禁じられています。購入者以外の第三者による電子データ化及び電子書籍化は、私的使用を含め一切認められておりません。
©2099 MURASAKISIKIBU
ISBN978-4-9999-9999-0　　Printed in Japan

カバー

そで（折り返し）　表１　背表紙　表４　そで（折り返し）

ボーン・ナース

「ハワイのナイチンゲール」谷村カツの生涯

中野次郎

ボーン・ナース

中野次郎

9784904880005

1920023018006

ISBN978-4-904880-00-5
C0023 ¥1800E

株式会社ＧＩＦＴ
定価（本体1800円＋税）

⇐出版コード

⇓帯

いまから百年前のホノルルに　日本人専門病院があり、
たくさんの日本人医師がいた！
そして、太平洋の荒波を渡ってきた看護師がいた。
ハワイに住む人々は、誰もが彼女を
ボーン・ナース（生まれながらの看護師）と呼んだ！

株式会社ＧＩＦＴ　　定価　1,800円＋税

ハワイ・ホノルル、マキキ墓地。
ここに、ひとりの日本人女性の墓碑がある。
彼女は、ハワイにわずか五年しか滞在していない。
しかし、百年経ったいまでも、
彼女の墓に線香や花が絶えたことはない――。
たった五年の間に、彼女はこの地でいったい何をなし得たのだろうか。
私の「谷村カツ」への旅は、こうして始まったのである。

ボーン・ナース

中野次郎

目次

はじめに……3
第一章　再会……7
第二章　ホレホレ節……53
第三章　カツとスエ……103
第四章　ペスト……153
終章　蘭の舟……195

第二章

ホレホレ節

明治三十年代のハワイにおける日本人医師たち

小林参三郎が創立した日本人病院

一

一八九九（明治三十二）年七月二十八日夕――。

ホノルルの日本人牧師、奥村多喜衛の家で、谷村カツの歓迎会が催された。

開け放たれた白い縁どりの窓から、ようやく涼しくなった風が流れ込み、汗ばんだカツの肌を撫でていった。

まだ、外は明るい。ハワイの黄昏は、名曲の終わりのフェルマータのように美しく長い。

再び、白いレース状のカーテンが大きく揺れ、少し強めの甘い香りの風が奥村の瀟洒な家の中を通り過ぎていき、部屋の隅に置かれた花瓶の中のブーゲンビリアの花弁を揺すった。

リビングの洋風のテーブルには、パイナップルやマンゴーなど、カツがそれまでに見たこともないような色とりどりの南国の果実が竹の籠に盛られている。その向こうのダイニング・テーブルには、タロイモのペースト「ポイ」、蒸し料理「ラウラウ」、それに「ルアウ」というココナッツシチューなど、質素ながらも、さまざまな家庭料理が用意されてあった。

「本日、香港号で来布されました谷村カツさんです。こうして巡り合えたことを神に感謝します」

髪をオールバックにきちんと整え、効きすぎるほどノリの効いた白い半袖シャツ姿の奥村が十字を切りながら、その日の参加者たちに日本からの来訪者カツを紹介すると、まわりから大きな拍手が湧いた。

その中には、もちろん、神田重英、スエ夫妻もいた。

カツを歓迎した奥村多喜衛は、一八六五（慶応元）年、土佐藩士奥村又十郎の長男として、高知県安芸郡に生まれた。藩主山内容堂の諮問役で、漢学者であった父から武士の教育を受けて育ったが、明治に入ると、文明開化に目覚め、一八八八（明治二十一）年、二十三歳で大阪教会で洗礼を受けた。

一八九〇（明治二十三）年、同志社神学校に入学したが、在学中から日本人移民が多くいるハワイでのキリスト教伝道の意義を知り、神学校を卒業すると単身ハワイに渡った。

そして、キリスト教の牧師として伝道に専念するかたわら、日本人の子供のために幼稚園、小学校を創設した男であった。

「谷村カツです。神田スエの姉です。どうか、よろしくお願いします」

カツが丁寧に腰を折ると同時に、マグネシウムのフラッシュがポンと音を立て、閃光が一瞬、あたりを明るくした。ハワイ「やまと新聞」のカメラマンがシャッターを切った瞬間であった。

「粗餐ですが、どうぞ、テーブルのまわりにお集まりください」

著者　中野次郎（なかの・じろう）
一九二五年兵庫県生まれ。一九四九年兵庫県立医専（現・神戸大学医学部）卒。
一九五九年神戸大学より医学博士号授与。一九五〇年渡米。ホノルル聖フランシス病院にてインターン研修。一九五二〜一九五九年シートン・ホール大学病院（現・ニュージャージー州立大学）一般内科、循環器内科研修医となる。一九五五年チーフ・レジデントに任命される。一九五六〜一九五八年コロンビア大学内科助手兼実験循環器研究室主任。一九五八〜一九六一年セントルイス大学内科助教授。一九六一〜一九六八年オクラホマ大学臨床薬理学兼内科準教授。一九六八〜一九六九年スウェーデン・カロリンスカ大学客員教授（ノーベル賞受賞者サミュエルソン教授研究室にて研究）。一九六九〜一九七五年オクラホマ大学教授。一九七五〜一九八五年ハワイ大学臨床薬内科準教授。一九八六年ハワイ・ヒロにて循環器内科開業。一九九四年神戸海星病院国際内科部長（のち顧問）。一九九五年神戸大学医学部講師。二〇〇〇年北摂総合病院理事。
一九八五年コロンブス財団より米国ブック賞受賞。
著書『誤診列島』、『名医発見』『ハワイマナ』（ともに集英社）、『患者漂流』（祥伝社）ほか多数。

装丁・デザイン——清家洋二

ボーン・ナース
「ハワイのナイチンゲール」谷村カツの生涯

2012年６月20日　第１刷発行

著者　　中野次郎
発行所　株式会社GIFT
　　〒113－0001　東京都文京区白山１－33－19－501
　　電話03（3818）2495　FAX03（3813）9099
DTP　　福田工芸株式会社
印刷　　株式会社内外リッチ

ISBN978-4-904880-00-5
©Jiro Nakano 2012　Printed in Japan

落丁、乱丁本、お取り換えいたします。

自費出版「アルバム」のご案内

弊社福田が昨年「2001年　お遍路の旅」という写真集を作成いたしました。
写真とその説明（キャプション）があるだけの簡単なものではありますが、
一生の想い出の作品になるのではないかと思います。